第二部 ❖ 負の感情とその処理法

イニシエーションと軍事訓練の関係
——オウム真理教事件の一背景

大田俊寛
埼玉大学非常勤講師／宗教学

一九八四年、ヨーガを修習する団体として発足したオウム真理教。オウムの内部では、「イニシエーション」と称される修行の階梯が組み上げられたが、いつしかその教団は、生物化学兵器の使用さえ辞さない過激な殺人集団へと変貌していた。オウム真理教における教義や修行の体系と、結果として発現した暴力性のあいだには、何らかの内的関係が存在したのだろうか。本稿では、宗教学において論じられてきたイニシエーションという概念を「軍事訓練」という見地から再考することにより、オウム事件の隠された一背景に光を当てることを試みる。

1 宗教学とオウム真理教の共鳴
——島田裕巳『イニシエーションとしての宗教学』再読

麻原との対談における島田の言葉

一九九五年三月に地下鉄サリン事件が引き起こされ、オウムの動向が日本社会を震撼させていた時期、何人かの日本の宗教学者たちが、同教団に対して肯定的な見解を表明していたことから、厳しくその責任を問われた。宗教学者によるオウムの肯定や称賛とは、彼らが教団の実態を正しく把握していなかったという、単なる不注意から生じたものに過ぎなかったのだろうか。あるいは両者のあいだには、それ以上の根深い関係が存在していたのだろうか。結論から言えば、私には、その答えは後者であったように思われる。例えば、当時オウム擁護派の一人と見なされた宗教学者の島田裕巳は、一九九一年に気象大学校で行われた麻原彰晃との公開対談において、次のように述べている。

> オウムの信者の方はかなり若いと思うんですけれども、今の若い人たちというのは、（中略）物質的には豊かでありつつ、なんかこれでいいのかというふうに思っていると。（中略）人生で、ありのままの自分を見つめ、それとぶつかり合うような体験をしないまま大きくなっていると。イニシエーションという言葉は、反面では大人になるという意味だと思うんですけども、今の若い人は大人になるための自覚が少ない。（中略）オウム真理教の方々も、最初の段階ではそちら側の若い人一般みたいな傾向を持ちながら、あるときに、何かふとしたきっかけでオウム真理教にぶち当たるという経緯をたどってきているような気がするんですけれども。（麻原、一九九二：二三一－二三二）

すなわち、現代社会においては、子どもが大人になるための「イニシエーション」の契機が失われており、それに対してオウムは、その欠を埋めるような宗教運動を展開している、というわけである。

ここで論じられているイニシエーションとは、はたしてどのような含意を備えたものなのだろうか。それを確認するために、島田が宗教学者として自己形成する過程を描いた一九九三年公刊の書物、『イニシエーションとしての宗教学』の内容を振り返ることにしよう。

柳川啓一のイニシエーション講義

東京大学に入学した頃の島田は、ドライな性格の

若者の一人であり、大学で行われるほとんどの講義に関心を持つことができず、出席状況も芳しくなかった。とはいえ彼にとって、宗教学者の柳川啓一による講義は例外的であった。そこで柳川は、イニシエーションという概念を基軸に据えながら、さまざまな宗教体験について論じていた。高校時代、新左翼系セクトからの勧誘（オルグ）により、同級生の人格が急激に変容するという現象を目にしたことがあった島田は、イニシエーションという概念を用いれば、そのメカニズムを解明することができるかもしれないと考えたのである。

柳川の講義は、ファン・ヘネップやミルチャ・エリアーデをはじめ、数々の学者たちの研究を参照しながら行われた。まず人類学者のヘネップは、一九〇九年公刊の『通過儀礼』という書物において、出生・成人・結婚・葬式など、人生の節目となる時期に行われる諸儀礼に注目し、それらが「分離」「移行」「結合」という三つの段階から構成されていることを指摘した。そして彼は、子どもが成人を迎えて特定の年齢階級や秘密結社に加入する際の儀礼、すなわち「イニシエーション（「加入礼」や「入社式」と訳される）」を、通過儀礼の典型例の一つと見なしたのである。

また、宗教学者のエリアーデは、一九五八年に公刊した『生と再生』において、世界各地に見られるイニシエーションの儀礼を幅広く渉猟し、それらを比較分析した。彼によればその特徴は、若者に対して、一人で猛獣狩りに行かせる、歯を抜く、割礼を施す、互いに格闘させる、険しい山に登らせるなど、一連の厳しい試練を課す点にある。こうして若者は、いったん「死」の状態に落とされ、試練を乗り越えて「再生」を果たすことにより、成人としての第二の誕生を迎えるのである。このようにエリアーデは、ヘネップが示した通過儀礼の図式を、象徴的な「死と再生」の過程として描き直したのであった。

柳川の講じる宗教学の世界に魅せられた島田は、大学三年を迎えると、宗教学科に進学した。柳川のゼミにおいては、当時の最新の学術書が積極的に取り上げられたが、そこでの学問は、さまざまな理論の吸収に留まるものではなかった。当時の大学は、カウンター・カルチャーから強い影響を被っており、島田もまた、アメリカの人類学者カルロス・カスタネダが描き出す呪術師の修行の実践（島田、二〇〇二）や、アナーキズム的なコミューン運動に興味を引かれた。また柳川も、各地の新宗教や社会運動を実地調査すること、それらのメンバーたちと行動を共にしてみることを推奨した。あたかもその団体の本当のメンバーであるかのように装って行う調査のことを、当時の東大宗教学では「もぐり込み」と称していた。イニシエーションとは何より、さまざまな試練を自ら体験することにあると捉えられていたため、宗教の本質を理解するには、宗教学者もまた運動の渦中に飛び込み、イニシエーションの試練を乗り越える必要があると考えられたのである。

山岸会への参画

オウム真理教事件の際には、宗教学者の中沢新一もまた、それまでの言動の責任を厳しく問われたが、彼も島田と同様、柳川から指導を受けた弟子の一人であった。柳川の宗教観やイニシエーション論から示唆を受け、中沢は、ネパールにおけるチベット密教の修行に身を投じたのである。これに対して、島田がもぐり込みの対象として選んだのは、「山岸会」という名称のコミューンであった。山岸会の活動は、農業や養鶏を主体としているが、その究極的な目標は、「無所有一体」の境地を実現することにより、ユートピア的世界を地上に実現することに置かれていた。

山岸会において、正式なメンバーに加入する際には、「特講（特別講習研鑽会）」と呼ばれる合宿に参加することが義務づけられる。島田もまた、日光の施設において数日間にわたって行われた特講に参加した。特講の内容についてここで詳しく述べる余裕はないが（米本、二〇〇七を参照）、それは基本的に、執拗に尋問を繰り返すことによって参加者の自我の枠組みを解体させた後、コミューンの一体性という理想的・幻想的なヴィジョンを植え付けるもの、と理解することができる。

調査という目的を隠しながら特講に参加した若き島田は、そこで自らの内面に生じた体験に深く魅了された。「私にはしだいに、山岸会の考え方が正しいように思えてきた。我執から解放され、自由な見方をすることができれば、些細なことでつまずくこともなくなる。自己にとらわれず、自分が他者との密接な関係のなかで生かされていることに気づけば、だれも自分だけの利益を考えて、他者を貶めようとは考えなくなるはずだ。（中略）人間の社会に生じるさまざまな問題も、山岸会の立場から考えれば、個人の心の持ち方、考え方を変えることによって解決されていくことになる」（島田、一九九三：九一－九二）と。こうして彼は、「ミイラ取りがミイラになる」ような形で、山岸会への参画を決意したのである。

山岸会における島田の活動は長続きせず、約七カ月でコミューンから離脱したが、特講で体験した人格変容の有り様は、彼にとって重要な契機となった。島田は、山岸会での生活を自身にとってのイニシエ

ーション＝大人になるための試練として捉え、その体験をベースとしたコミューン論を著すことにより、修士号を取得した。またその後、一人の宗教学者として、大学に専任の職を得ることもできた。柳川啓一は一九九〇年、六三歳で世を去ったが、島田は師の教えによってイニシエーションの必要性を教えられ、その試練を乗り越えることにより、成人として独り立ちすることができたのである――。

イニシエーションの意味を理解していなかった？

『イニシエーションとしての宗教学』という書物には、大枠として以上のような半生記が記されているが、その公刊直後に島田の人生は、急激に暗転することになる。オウム真理教における過激な修行や出家生活を目にした島田は、イニシエーションを中心とする自らの宗教観に基づいてその活動を肯定的に評価し、地下鉄サリン事件以降、宗教学者としての見識を問われることになったからである。

『イニシエーションとしての宗教学』は二〇〇八年、『私の宗教入門』と改題のうえ、ちくま文庫より再刊されている。同書には文庫版あとがきとして、オウム事件の責任から大学を追われて以降の日々を回顧した「私の『失われた十年』」という文章が追記され、そのなかで島田は、「私は、本書の原本を書いた時点で、イニシエーションの本当の意味を理解してはいなかった」（島田、二〇〇八：二七二―二七三）と記している。正直な告白であることに疑いはないが、その言葉の無責任さには、思わず唖然とさせられざるを得ないだろう。「子どもが大人になる際に課される厳しい試練」といった曖昧な輪郭によって捉えられたイニシエーションという概念は、いつしか、破壊的カルトの活動さえも肯定・容認してしまうようなルーズなものに成り果てていたのである。

オウム事件以後、われわれ宗教学者が取り組まなければならなかった課題の一つは、これまで多くの研究者によって論じられてきたにもかかわらず、いまだに明確な輪郭が定まっていないイニシエーションという概念に対して、あらためてその本質を問うことであったはずである。イニシエーションとはそもそも、何を意味するのか。そこで以下では、あくまで一つの仮説を素描するレベルに留まらざるを得ないが、イニシエーションに関する私自身の見解を示してゆくことにしたい。

2 軍事訓練による人格改造の手法

殺傷への抵抗感とその克服

イニシエーションの本質とはこのようなことではないのか、と私が気づくきっかけとなったのは、宗教学や人類学の研究書を通してというよりも、一冊の現代戦争論の書物を通してであった。それは、デーヴ・グロスマン著『戦争における「人殺し」の心理学』である。グロスマンはアメリカの軍人兼心理学者であり、同書は、一般的な若者が軍に入り、戦場に送られて敵兵を殺傷するに至るまでの過程において、どのような心理状態を経験してゆくのかということを、明晰かつリアリスティックに描き出している。

同書のベースを形作っている認識とは、十分な訓練を受けていない兵士は、戦場においてほとんど敵を殺傷することができないという事実である。周知のように第二次世界大戦においては、多くの若者が練度の低い状態で戦場に駆り出されたが、彼らのなかで敵に向かって発砲することができた者は、平均して一五～二〇％程度に過ぎなかった。その大半は、故意に的を外した威嚇射撃を繰り返すに留まったのである。人はなぜ、同類を殺すことに強い抵抗感を覚えるのか。その確固とした理由は明らかではないが、そうした感覚が、「本能的、理性的、環境的、遺伝的、文化的、社会的要因の強力な組み合わせの結果として存在することもまちがいない」（グロスマン、二〇〇四：九六―九七）。

八〇％を超える兵士が敵に向けて発砲できないという事実は、軍部にとっては見過ごすことのできない大きな問題であり、そのため第二次大戦後のアメリカ軍においては、軍事訓練の研究と見直しが図られた（グロスマンによる心理学的研究も、そうした流れのなかに位置している）。そして、以下に述べるような対策が施された結果、続く朝鮮戦争やベトナム戦争においては、敵への発砲率を着実に上昇させることができた。人間に備わる同類を殺すことへの抵抗感は、人為的な方法で引き下げることができる、すなわち、「人間を殺傷しうる人間」は、製造可能なのである。以下にその方法を見てゆこう。

これまでの長い歴史のなかで、軍事訓練の基礎となってきた伝統的手法は、新兵に対する徹底的な「しごき」である。スタンリー・キューブリック監督の著名な映画『フルメタル・ジャケット』に描かれているように、入隊したての新兵は、サディスティックな罵倒の嵐に見舞われ、些細な過失に対しても、過酷な身体的懲罰を課される。また多くの軍隊では、ボクシングや棒を使った殴り合いなど、各種の荒々しい格闘を行うことが、新兵の「通過儀礼」として定められている。実際の戦場は、「憎悪の風」と称されるような高度のストレス状況が常態化した世界で

あり、ゆえに新兵に対しては、その基本的なストレス耐性を向上させることが、軍事訓練における最初の課題となる。

本書ではさらに、スタンレー・ミルグラム、コンラート・ローレンツ、エーリッヒ・フロムらが提示した諸理論や実験結果に依拠しながら、兵士の殺傷行為を推進する諸要因について論じられる。それは主に、（1）権威者の要求、（2）集団免責、（3）犠牲者との総合的距離、の三点である。各内容は、以下のとおりとなる。

（1）戦場で兵士が敵に向かって発砲する最大の理由は、「撃たないと撃たれるから」といったものではなく、実際には、「撃てと命令されるから」である。断固たる意志を備えた指揮官の存在は、戦場においてきわめて重要であり、兵士たちはそのような人物に対して自らの行動の決定権を全面的に委ね、彼の命令一下、発砲に踏み切ることになる。

（2）戦闘部隊では、集団への一体化や同一化がとりわけ強固に成立し、その絆はときに、家族よりも強いものとなる。兵士たちは、仲間を守らなければならないという義務感から、あるいは、仲間とのあいだの相互監視に促され、敵への発砲を行う。

（3）敵を殺傷するためには、犠牲者との距離を取ること、すなわち、敵を自分と同じ人間と見なさないことが重要である。具体的には、人種的・民族的な違いを強調することにより、「敵は畜生以下だ」という意識を植え付ける、自軍の倫理的優越性と復讐・制裁の正当性を固く信じ込ませる、テレビ画面や暗視装置などの機械的な緩衝物を介在させ、犠牲者が人間であることを意識させないようにする、といった方法がある。

こうした理論を踏まえながら、ベトナム戦争時の基礎訓練においては、（a）脱感作、（b）条件付け、（c）否認防衛機制、という三つの手法が採り入れられた。これらについても、概要を説明しておこう。

（a）敵は自分とは異質な人間である、それどころか人間でさえないのだ、という意識の徹底的な刷り込み。敵を人間の名前で呼ばず、グックやディンク（ベトナム人）、スロープ（東洋人）、コミー（共産党員）といったスラングで呼ぶことは、脱感作に向けた道のりの第一歩を意味している。

（b）人間に似せた標的を用意し、それが出現した瞬間に発砲するという訓練を、何千回、何万回も繰り返す。「パブロフの犬」の実験と同様の条件付けによって、殺害への抵抗感が生じるより早く、行動に及ぶことができるようになる。

（c）脱感作と条件付けの効果を結合させることにより、殺害への抵抗感はさらに押し下げられる。すなわち、自分が銃を向けているのは、人間の従うべき道徳や規則などを顧みようとしない無法者であり、訓練時の標的を打ち抜くのと同じく、迅速に排除するべきであるという意識を刷り込んでゆく。

ベトナム戦争とＰＴＳＤ

こうした訓練に自覚的に取り組んだ結果、ベトナム戦争における敵への発砲率は、実に九五％にまで上昇した。軍に入隊したアメリカの若者の意識は、今や根本的な変容を遂げたのである。グロスマンは、イスラエルの軍事心理学者ベン・シャリットの「抗争と戦争の心理学」から、次の言葉を引用している。「基礎教練キャンプの目的は、新兵のそれまでの考えかたや信念をすべて土台から突き崩し、市民としての価値観を突き崩し、自己イメージを変化させること――すなわち、完全に軍隊組織に従属させることである」（グロスマン、二〇〇四：四八三）。

しかしながらアメリカ軍は、若者たちを「戦闘機械」に変貌させることに成功した見返りとして、別種の大きな問題を抱え込むことになった。すなわち、帰還兵の多くが、ＰＴＳＤに罹患するようになったことである。

殺人に対する本能的抵抗感を克服し、その行為に現実に手を染めたとき、人はどのような感覚を覚えるのか。何人かの兵士たちが躊躇（ためら）いながら告白した内容によると、意外にもそれは、ときに圧倒的なカタルシスや多幸感がもたらされる、というものであった。その快感は、セックスにおける快感と同類、あるいはそれを何倍にも増幅したようなものであり、人はその際に、絶対的自由の感覚や、至高の全能感に浸されることになる。

とはいえ、そうした激しい快感は、言うまでもなく瞬時に過ぎ去り、その後には、精神の混濁と抜き難い苦痛が兵士を苛むことになる。多くの兵士に現れるのは、極度の疲労、錯乱、妄想、人格の解離、性格の著しい変貌など、ＰＴＳＤに関わる諸症状である。

グロスマンによれば、これまでの戦争の歴史においては、兵士の精神的苦痛を緩和するためのさまざまな慣習が存在してきた。同輩や上官による殺害行為の正当化、戦場から時間をかけて帰還することによる冷却期間の確保、帰国した際の凱旋パレード、記念建造物の創設、度重なる叙勲、などである。これらの行為は、兵士の人格を戦時のそれから日常的なそれへと復帰させるための「通過儀礼」としての役割を果たしていたのである。

しかしベトナム戦争の際には、このような処方箋がほとんど機能しなかった。兵士たちは、飛行機に

よって短期間での帰還を余儀なくされ、そして祖国においては、ベトナム反戦運動に基づく非難や罵倒を浴びせかけられた。ベトナム戦争に従軍した兵士たちの多くは、帰国後にPTSDを悪化させてゆき、戦時のみならず日常生活においても、各種の向精神薬に深く依存していった。長い歴史のなかで、戦争と薬物は相互に密接な関係を保ち続けてきたが、それはベトナム戦争において、一つの極点に達したと見ることができるだろう。

3 未開社会(前国家的社会)における戦士の育成

ヘネップとエリアーデが描く軍事的イニシエーション

人間の人格や心情が、根本的に「共感」のシステムに基づいて組み立てられているためか、人間は誕生し成長したそのままの状態では、容易には他者を殺傷することができない。しかし人間の社会生活においては、どうしてもそれに踏み切らなければならない局面が往々にして出現する。ゆえにイニシエーションの基本的役割とは、十分な体力が備わった若者に対して、いざというときに敵を殺傷するための方法を教えること、また、それに耐えうるような人格的・精神的変容をもたらすことにあったのではないかというのが、現在の私の考えである。

このような推定は、一見したところ突飛で極端なものに思われるかもしれないが、必ずしもそうとは限らない。というのは、ヘネップやエリアーデによる古典的研究においてすでに、イニシエーションがしばしば軍事的性質を帯びるということが指摘されてきたからである。以下に、両者の論説をあらためて振り返ろう。

『通過儀礼』においてヘネップは、ポリネシア・タヒチ島の「アリオイ」という結社と、アフリカのマサイ族の階級組織について触れている(ヘネップ、二〇一二:一一二-一一七)。ヘネップによればアリオイは、政治・戦争・略奪を目的とした結社であり、その組織は七つの階級に分かれ、各成員が属する階級は、身体に刻み込まれた入れ墨によって識別される。アリオイのイニシエーションは、名前の変更、新米による自分の子どもの「殺害」(詳細は不明)、結社の聖歌を歌うために必要な姿勢の修得、酋長の妻の衣服の奪取、といった一連の手続きによって進められる。こうした儀礼は階級が上がるたびに繰り返され、その際には、聖なる豚を全員で共食する、性や食物に関する日常的なタブーを侵犯する、といった事柄が行われる。

マサイ族は、武勇をもって知られるアフリカ東部の部族であり、その社会は、戦士の役割を担う年齢階級を中心として構成される。一二歳から一六歳になり、十分な体力がついた若者は、戦士階級に加入するための儀礼に参加する。彼らは、二、三カ月のあいだ集落から集落へと渡り歩いた後、冷水で体を洗い、割礼を受ける。その傷が癒えると、頭を小鳥と駱駝の羽で飾り、こうして彼は、一人の戦士(ムラン)として認められるのである。[1]

次にエリアーデは、『生と再生』において、北欧神話に登場する「ベルゼルカー(狂暴戦士)」の形象を皮切りに、世界中に見られる軍事的イニシエーションの様相について考察している。ベルゼルカーとは、字義どおりには「熊の皮をつけた戦士」を意味し、エリアーデによれば、彼は呪術的な力によって熊と融合した状態にある。若者は、数々の壮烈な試練をイニシエーションとして乗り越えることにより、はじめて勇猛な戦士に変容することができるのである。例えば、ゲルマンの一種族のチャッティ族では、イニシエーションの志願者は、敵を一人殺すまでは髪や髭を切ることが許されなかった。タイファリ族では、若者は猪か狼を倒さねばならず、ヘルリ族の若者は、素手での戦闘を求められた。「こうした試練を通して志願者はみずから野獣的存在様式を身につける。彼は猛獣の如くふるまう一人前の恐るべき戦士となる。彼は食肉動物に固有の呪術宗教力に同化することに成功したゆえに、超人に変質する」(エリアーデ、一九七一:一六九-一七〇)。

さらにエリアーデは、若者の猛獣への変容が、ときに祖先の霊魂との一体化をも意味することを指摘している。トーテミズムと称される信仰形態に典型的なように、未開社会においては、祖霊が各種の動物によって表象されることが多い。例えば、そこで用いられる「ブル・ローラー」という器具が発する音は、猛獣の唸り声を表すと同時に、神や祖霊といった超自然者が現前する徴(しるし)としても捉えられる。若者は祖霊との交流によって、超自然的存在に変容を遂げるのである。

戦士となった若者は、ときに周囲を戦慄させるような狂暴的発作を露わにする。彼は極度に激昂し、その内面は、抗しがたい気迫と戦闘力によって満たされる。エリアーデによればその力は、シャーマンが操る「聖なる力」や「呪的灼熱」と同種のものであり、ヒンドゥー教のタントラ派のテキストは、それを「クンダリニーの燃焼」と表現している。戦士とシャーマンのイニシエーションは、それぞれ異なる道を辿ってはいるが、そこで追求される目的は基本的に同じこと、すなわち、それまでは俗的存在であった修練者(ノヴィス)をいったん死なせ、その後に、一個の

新しい超人的存在として復活させることである。「軍事的イニシエーションでは、イニシエーション的死は、シャーマンの入巫儀礼に見られるほどはっきりしてはいない。若き戦士の主要な苦行はまさにその敵に打ち克つことであるからだ。しかし彼は燃え上がり、狂暴戦士（ベルゼルカー）の激怒――俗人の状態に死せることをあらわす徴候に達して始めて試練から勝利者として起ちあらわれるのである。魔的燃焼を得るものは、あきらかに彼が超人間界に属することをしめす」（エリアーデ、一九七一：一八〇）。こうしてエリアーデは、イニシエーション＝象徴的な死と再生のプロセスを通過した者が、それまでとは別種の新たな主体性を身に帯びるということを強調したのである。[2]

ピエール・クラストルによる未開社会の戦争論

エリアーデ以後の研究において、イニシエーションに備わる軍事的性質は、その諸特徴の一つと見なされることはあっても、特別な注目を集めることは少なかった。しかし、そうした状況のなかで例外的な位置にあった研究者は、ピエール・クラストルというフランスの人類学者である。彼はその業績のなかで、未開社会における戦争のあり方を再考する必要があることを主張した。

南米での豊富なフィールドワークの経験を有するクラストルは、未開社会の諸部族に見られるイニシエーションの有り様を、端的に「拷問」と表現している。北米インディアンのマンダン族の儀礼においては、四日間の断食と三夜の不眠を課された後、身体に穴を穿（うが）たれ、宙吊りにされ、肉を引き裂かれなければならない。南米のグアヤキ族では、若者が失神してしまうまで、彼の背全体に傷をつけ続ける。ムバヤ-グアイクル族において、戦士の階級に加入する若者は、鋭く尖らせたジャガーの牙を、男根やその他の部位に突き刺すことを求められる。イニシエーションはほぼ例外なく、新規加入者の身体を対象として行われ、そこに忘れえない痛苦を刻み込むのである。クラストルは、イニシエーションの特質を次のように規定する。

> 加入儀礼とは、集団から個へ、部族から若者へと向けられた教育である。一方的断定による教育であって対話ではないし、加入者は責苦のもとで沈黙を守らねばならない。黙することは合意すること。が、若者は何に合意するのか。彼らは（中略）共同体の充全な成員たることを自らに引き受けることに合意するのだ。（中略）いいかえれば、社会は成員に社会自らの法を書きとらせ、社会は身体の表面に法のテクストを刻みこむのだ。なぜなら、部族の社会生活を基礎づける法は、何人もこれを忘れると見なされえないのだから。（クラストル、一九八七：二三〇-二三一、強調は原文）

イニシエーションを通じて社会は、若者の身体に対し、共同体の精神や歴史的記憶、さらには、法そのものを刻み込む。彼はそれにより、部族の尊厳と自由を賭けて闘う一人の戦士へと成長するのである。

しかし、クラストルは同時に、未開社会＝前国家的社会における法や戦争が、国家的社会におけるそれとは根本的に異なることを強調している。すなわち、国家において法とは基本的に、支配者から被支配者へと課せられるものであり、それは多くの人間たちにとって外在的である。また、国家による戦争は、他の国家や社会を服従させるために行われ、ゆえに戦争に敗れた側は、軍事力を行使する権利を剝奪されることになる。

これに対して、未開社会＝前国家的社会においては、社会の階級分化や機能分化がいまだ明確には形成されていない。そこには、支配者と被支配者の区別はなく、法は上から課されるというより、諸儀礼を通じて個々の成員の身体に刻み込まれる。それは諸個人にとって内在的であり、共同体の「自律（オートノミー）」の原理として機能するのである。そして未開社会における戦争は、他者を完全に征圧し、服従させるために行われるのではない。それは、個々の共同体の誇りと固有性を維持するためにこそ行われるのである。

クラストルは、国家の基本原理が「求心性」と「外在性」、すなわち、国家という一者に対してすべてを服従させようとする原理であるのに対して、未開社会の原理は、「遠心性」と「内在性」、すなわち、多様性の拡散を希求する原理であると捉える。未開社会とは本質的に、「国家に抗する社会」なのである（クラストル、二〇〇三）。

未開社会のイニシエーションの特質

グロスマンが描く現代戦争論と、ヘネップ、エリアーデ、クラストルらが描く未開社会のイニシエーション論は、軍事的訓練によって若者を変容させるという点で大きな共通性を持つものの、言うまでもなく両者のあいだには、大きな差異も存在する。後者に特徴的な点をいくつか列挙すれば、それは次のようになるだろう。

1　共同体の神や祖霊との交流や、神話的な世界観・死生観の教示という側面が含まれる。

2　敵を非人間化するばかりではなく、ときに自らが非人間的存在（超人や猛獣）に変容する。

3　軍事全体が、歌謡・舞踏・身体装飾など、文化芸術的・遊戯的側面を兼ね備える。
4　軍事行動が十分に組織化されておらず、各戦士は、自らの意志と尊厳に基づいて闘う。

4　反（非）国家的結社におけるイニシエーション

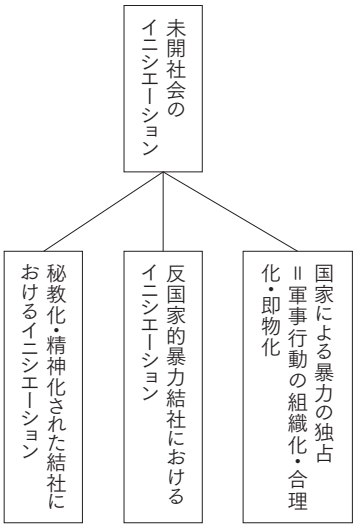
国家に抗する諸結社

周知のようにマックス・ウェーバーは、近代の主権国家の本質が「暴力の独占」にあることを指摘した。しかしそうした傾向自体は、何も近代国家のみに備わっているわけではない。古代以来の国家の発展とは、国家による暴力の独占化・専門化・合理化が進展するプロセスであり、近代の主権国家による完全な「暴力の独占」とは、そうした長いプロセスの末に結実したものと捉えるのが妥当だろう。国家組織の発展により、その他のさまざまな社会は、暴力を自ら行使する権利や資格を剝奪されてきたのである。[3]

それでは、あらゆる社会は、そうした流れにひたすら唯々諾々と従ってきたのだろうか。必ずしもそうではない。古代から現代に至るまで、国家による支配を容認せず、独自の共同体形成の原理や、暴力行使の権限を保持しようとする諸団体が存在し続けてきたからである。その形態はきわめて多種多様だが、義賊や匪賊、暴力団、秘密結社、反（非）国家的宗教結社などが、それらに相当する。古代から現代までの歴史において、典型的なイニシエーションとは、そのような結社の内部で維持されてきたと考えることができるだろう。

今日、暴力的な結社として特に知られているものに、イタリア発祥の「マフィア」や、中国の「幇（パン）」があるが、[4]例えばマフィアに加入する際には、次のような儀礼が行われる。まず加入者は、「血の掟」と呼ばれる、組織において厳守すべきルールについて説明される。それは、仲間を守れ、他の男のものである女を望むな、組織の秘密を外に漏らすな、といった内容である。続いて加入者は、参列者の前で自分のボスとなる人物を選ぶ。すると代理人は、銃を撃つ際の利き手を彼に尋ね、その手に針を刺し、マフィアの守護聖人である聖母の絵の上に血を垂らす。加入者が決して組織を裏切らないという誓いの言葉を口にしているあいだ、聖なる絵に火がつけられ、メンバーの手から手へと回される。その儀礼は、彼らが血の絆で結ばれたことを意味すると同時に、組織を抜けようとすれば、加入者の血が流されるということを暗示するのである（ピエルサンティ、二〇〇七）。

他方、国家による暴力独占の進行という状況に対応して、後に見るフリーメーソンや神智学協会のように、イニシエーションの形式を純粋に秘教的・精神的なものに昇華させようとする諸団体も出現した。全体として見れば、未開社会のイニシエーションは歴史の過程において、左図のような変容と分化を遂げてきたと考えることができる。



イニシエーションの歴史的変容

反国家的暴力結社、あるいは秘教化・精神化された結社の多くにおいては、メンバーたちが「ファミリー」や「ブラザー」といった疑似的家族関係を示す強い絆で結ばれること、組織の掟が一般社会の法に優越することなどが取り決められている。こうした結社の例は枚挙に暇がないが、ここでは特に、オウム真理教との類似性や影響関係が認められる三つのケースについて紹介しておこう。

（1）イスマーイール派の「暗殺団（アサシーニー）」

イスマーイール派とは、九世紀頃、シーア派から分裂することによって成立したイスラム教の一派である。そもそもシーア派では、イスラム法を尊重するスンナ派に比して、「イマーム（先導者）」の権威を重視する傾向にあったが、イスマーイール派においてイマームは、神と同等の存在にまで高められた。イスマーイール派は一一世紀末、さらに二派に分裂し、そのなかのニザール派は、イラン北部アラムート渓谷に築かれた城砦を中心に、強固な結束を有する共同体を形成した。その頂点には、イマームの代理人である「最高伝教師」が位置し、以下「山の長老」と呼ばれる指導者をはじめとする階級組織が設けられた。同派への入団を許され、階級を上ってゆくためには、数々のイニシエーションを乗り越え、教義の秘奥に通じることが求められたのである。

イスマーイール派の教義は、古代末期の秘教グノーシス主義から影響を受けたと思われる二元論をその特色とし、さらにニザール派はそうした世界観をもとに、教団に敵対する人物を次々に暗殺したことで知られる。そこからいわゆる「暗殺団（アサシーニー）」の伝説が生まれた。『東方見聞録』で知られる歴史家のマル

コ・ポーロによれば、ニザール派はアラムート渓谷に美しい庭園を作り、屈強な若者を見つけると彼を薬で眠らせ、そこに運び入れた。目を覚ました若者は、美女たちによる歓待を受け、そこを真実のパラダイスであると信じ込むようになる。いったん庭園での生活を送ると、世俗の世界には戻れなくなるため、若者たちは「山の長老」の指令に盲従し、躊躇なく暗殺を遂行したという。後には、若者に与えられた薬が「大麻」であったという話が付加され、ニザール派はヨーロッパにおいて、「暗殺団」と通称されるようになった。

今日の研究の見地からすれば、「暗殺団」の伝説は、同派の教義や世界観と相容れない点が多数含まれているため、史実とは相当に異なるものと考えなければならない。とはいえ、薬物が長い歴史において、殺人や戦争と密接な関わりを持ち続けてきたことから鑑みれば、ニザール派もまた、伝説の出所になりうるような薬物との関係を有していたのかもしれない（この項は岩村、一九八一／井筒、一九九二を参照）。

（2）白蓮教

白蓮教とは、南宋王朝初期の僧、茅子元が創始した、「白蓮宗」に由来する民間宗教の総称である。茅子元は、念仏などの修養を通して自己の内なる弥陀（本性弥陀）を発見するべきことを説いた。こうした信仰に、シルクロードを渡って伝えられたマニ教に基づく二元論が付加され、現在の世界は闇の原理の支配によって汚辱されており、遠からず破局を迎え、その後に本来的な光の世界が回復されるという歴史観・終末論が形成された。茅子元の白蓮宗そのものは、短期間のうちに異端として排除されたが、その理念は清代に至るまでさまざまな形で継承され、多くの宗教結社を生んだ。それらは研究者のあいだで「白蓮教系民間宗教」と称されている。

白蓮教では光が崇拝され、結社への加入の際には、火を用いた儀礼が執り行われた。その一例は、次のようなものである。まず新入教徒は、師に誓願を立て、決して教えに背かないことを約束する。すると教主は、彼の姓名を紙に記し、それに火をつけて燃やす。これによって新入教徒は、光の世界に存在する真実の「家」の一員となったと見なされ、結社の儀礼に参加することが認められる。夜に行われるその儀礼は、灯火を礼拝しながら鉦・鼓を打ち鳴らし、呪文や経典を詠唱し続けるというものである。信者たちは一心に火を礼拝することにより、自らの内面に真の光を見るという神秘体験に誘われたという。

白蓮教系の結社は、闇の世界の終焉を受動的に待っていたわけではなく、しばしば武装蜂起し、自らの手で現体制を打倒しようとした。白蓮教の乱は清代まで繰り返されたが、その代表例の一つに、元末に起こった「紅巾の乱」がある。この動乱では、「明王」を名乗る多くのメシア的人物が現れ、最終的には朱元璋が覇権を掌握し、元を打倒して明を創始することになった（この項は山田、一九九八を参照）[5]。

（3）フリーメーソン・神智学協会

言うまでもなくフリーメーソンは、自ら暴力を行使しようとする結社ではないが、先述のように、それに代わってその内部では、秘教的・精神的イニシエーションの形式が著しく発達した。地域によって差が見られるものの、フリーメーソンには、「マスター」を中心とする階級組織と、「ヒラム・アビフ」の神話に基づくイニシエーションが設定されている。同組織によれば、ヒラム・アビフとはソロモン神殿の建設責任者であり、メーソンの秘密を守るために殺害され、その後に復活を遂げたという。そのイニシエーションはやはり、「死と復活」を主なモチーフとしているのである。

フリーメーソンが普及すると、それに倣ったいくつもの秘教的・オカルト的結社が登場してきた。ロシアの霊媒ブラヴァツキー夫人は、古今東西の宗教思想を融合させた教義を作り上げ、一八七五年に神智学協会を設立した。同会ではフリーメーソンと同様、「マスター（大師）」を中心とする階級組織が構想されたが、そこにおいてマスターは、地球全体を統治する霊的・超人的存在にまで格上げされている。ブラヴァツキーの書物『シークレット・ドクトリン』によれば、人間の霊魂は宇宙的進化の途上にあり、人はマスターから隠された真理を教示されることにより、速やかに霊性のレベルを向上させることができるのである。一八七九年、神智学協会の本部がインドに移転したことをきっかけに、同会はヒンドゥー教からの影響を色濃く被り、そのイニシエーションにおいては、特にクンダリニー・ヨーガの技法が重視された（この項は吉村、二〇一〇／大田、二〇一三を参照）。

5 おわりに ――軍事訓練と化したオウムの「修行」

オウムにおけるイニシエーションの変遷

一九八四年にオウム真理教が「オウム神仙の会」というヨーガ団体として出発した頃、その目的は主に、ヨーガの修行によって個々人の霊性を開発することに置かれていた。ところが、団体の活動が進展するにつれ、オウムはその内部に潜む暴力性をだん

だんと露呈させることになった。ここでその軌跡を詳しく記述することはできないが、オウムで実践された数々のイニシエーションの形式を中心に、重要な点を振り返っておこう。

最初のきっかけとなったのは、オウムの修行において、麻原彰晃が信者に施す「シャクティパット」という技法が重視されたことである。クンダリニー・ヨーガでは、尾骶骨に眠る「クンダリニー（螺旋）」という生命エネルギーを覚醒させる必要性が説かれるが、シャクティパットとは、麻原が信者の眉間に親指を押し当て、エネルギーを外部から注入することによってその覚醒を促す技法である。初期のオウムにおいては、これによって神秘的現象を体験したという信者たちが多数現れ、彼らは「超人類」への道を歩み始めると同時に、そこから麻原の教祖化・神格化が進行することになった。また、麻原のイニシエーションをいち早く通過した信者が「大師」の地位を認められ、教団幹部の役割を担うようになっていった。

そしてオウムは、八八年に富士山総本部道場の建設を計画し、そのための資金を調達し始めたが、その際に一〇〇万円以上を献金した信者に対しては、「血のイニシエーション」が施された。すなわちそれは、麻原の血を溶かした液体を飲むという儀礼であり、信者の霊性を向上させると同時に、麻原と信者の一体感を高めるために行われたと思われる。しかし一般社会は、これを猟奇的なものと見なして激しく反発し、オウムへのバッシングや反対運動が繰り広げられることになった。結果としてその騒動が、坂本弁護士一家殺害事件に結びつくことになる。これに対して麻原は、こうした殺害行為を「ポア（魂の移転）」というチベット密教の用語で呼び、救済のために不可欠な行為であると正当化した。

九〇年に「真理党」を結成して衆議院総選挙に立候補し、手酷い敗北を喫した後、オウムは本格的な武装闘争に路線を転換してゆく。すなわち、一部の幹部たちが「シークレット・ワーク」という名称のもとで各種の兵器開発に携わる一方、多くの信者に対しては、彼らをオウムのために闘う「戦士」として育成するためのイニシエーションが施されていった。すなわち、麻原の脳波をそのまま移植することを謳った「パーフェクト・サーベーション・イニシエーション」、人が死亡するシーンを集めた映像を見せ続ける「バルドーの導き」、LSDの入った溶液を飲み、迅速に神秘的現象を体験させる「キリストのイニシエーション」などである。その活動の末期においては、三泊四日の日程での野外訓練、モデルガンを用いた武器の講義やサバイバル・ゲームなど、直接的な軍事訓練も行われた。

危険な概念を弄んだオウムと宗教学者

これまでの長い人類史において、若者が自分の共同体を守るために戦う技法を修得するというイニシエーションの契機は、きわめて重要なものとして存在してきた。それは若者にとって、一人の成人としての責任を課されると同時に、人間の生死とは何かということを具体的に考える機会をも提供してきたのである。

とはいえ、そうしたイニシエーションは、国家による「暴力の独占」が進むことにより、次第に一般市民の手から奪われていった。さらに、第二次世界大戦の敗戦によって平和国家への道を歩み、憲法上は国家による軍事力の行使さえ放棄した日本において、暴力性の剝奪のプロセスは、一つの極点に達したと見ることができるだろう。そして言うまでもなくそうした事態は、否定的にのみ捉えるべきことではない。しかしその影響として、若者が生と死のリアルな姿に向き合う機会が失われてきたということも、無視し得ない事実である。

オウム真理教をその根底で駆動させていたのは、「人が死ぬとはどういうことか」という、単純にして難解な問いであった。そして実はその同じ問いに、二〇世紀の宗教学もまた取り憑かれていた。結果的に両者は、イニシエーションという本来は危険な概念を不用意に弄び、そこに潜んでいた暴力性を噴出させることによって自らを、そして社会を傷つけてしまったのではないかと、私には思われるのである。

注

1 マサイ族の儀礼や階級組織については、サンカン（一九八九）やレクトン（二〇〇六）に詳しい。

2 エリアーデは論文「ダーキア人と狼」において、狼という表象と軍事的イニシエーションの関係を論じている（エリアーデ、一九七六）。そのテーマに関して若者論の観点から考察した村瀬学（二〇〇〇）をも参照。

3 ゆえに、国家からのそうした干渉によって、未開社会の制度や儀礼が根本的に変質している可能性を考慮に入れることは重要である。例えばリード（一九八八）には、ケニア政府からの制約により、マサイの戦士階級が徐々に自主的な暴力性を剝奪される様子が描かれている。

4 幇という組織の実態については、宮崎学（二〇〇一）の内容が興味深い。

5 麻原彰晃もまた、白蓮教とオウム真理教のあいだに類似性を感じ取っていたらしく、朱元璋を自らの前世の一つと称し、一九九四年二月には、教団幹部を引き連れて朱元璋ゆかりの地を巡る中国ツアーに出向いている。麻原はその際、近く自分が「日本の王」になることを宣言し、それにより教団活動の過

激化が速度を増していった。

参考文献

麻原彰晃（一九九二）『自己を超えて神となれ！大人気を呼んだ尊師大学講演会特集』オウム出版。
ピエール・クラストル（一九八七）渡辺公三訳『国家に抗する社会――政治人類学研究』書肆風の薔薇。
ピエール・クラストル（二〇〇三）毬藻充訳『暴力の考古学――未開社会における戦争』現代企画室。
ミルチャ・エリアーデ（一九七一）堀一郎訳『生と再生――イニシエーションの宗教的意義』東京大学出版会
ミルチャ・エリアーデ（一九七六）斎藤正二訳『エリアーデ著作集11　ザルモクシスからジンギスカンへー』せりか書房。
ファン・ヘネップ（二〇一二）綾部恒雄・綾部裕子訳『通過儀礼』岩波文庫。
デーヴ・グロスマン（二〇〇四）安原和見訳『戦争における「人殺し」の心理学』ちくま学芸文庫。
岩村忍（一九八一）『暗殺者教国――イスラム異端派の歴史』リブロポート。
井筒俊彦（一九九二）「イスマイル派『暗殺団』――アラムート城砦のミュトスと思想」『井筒俊彦著作集9』中央公論社。
ジョゼフ・レマソライ・レクトン（二〇〇六）さくまゆみこ訳『ぼくはマサイ――ライオンの大地で育つ』さえら書房。
宮崎学（二〇〇一）『アジア無頼――「幇」という生き方』徳間文庫。
村瀬学（二〇〇〇）『なぜ大人になれないのか――「狼になる」ことと「人間になる」こと』洋泉社。
S・S・オレ・サンカン（一九八九）佐藤俊訳『我ら、マサイ族』どうぶつ社。
大田俊寛（二〇一一）『オウム真理教の精神史――ロマン主義・全体主義・原理主義』春秋社。
大田俊寛（二〇一三）『現代オカルトの根源――霊性進化論の光と闇』ちくま新書。
シルヴィオ・ピエルサンティ（二〇〇七）朝田今日子訳『イタリア・マフィア』ちくま新書。
デーヴィッド・リード（一九八八）寺田鴻訳『マサイ族の少年と遊んだ日々』どうぶつ社。
島田裕巳（一九九三）『イニシエーションとしての宗教学』ちくまライブラリー（二〇〇八年『私の宗教入門』ちくま文庫として再刊）。
島田裕巳（二〇〇二）『カルロス・カスタネダ』ちくま学芸文庫。
山田賢（一九九八）『中国の秘密結社』講談社選書メチエ。
米本和広（二〇〇七）『洗脳の楽園――ヤマギシ会という悲劇』（新装版）情報センター出版局。
吉村正和（二〇一〇）『図説 フリーメイソン』河出書房新社。